

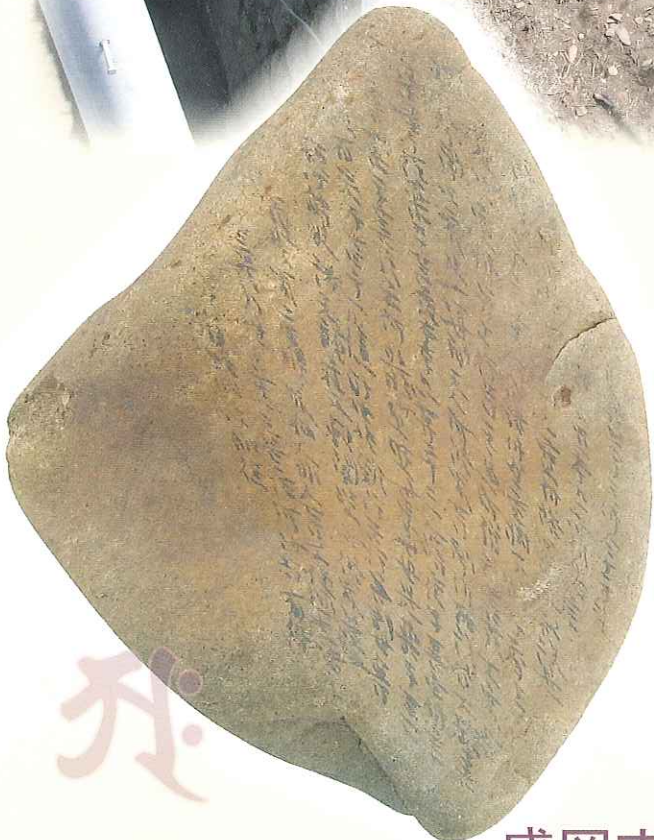
祈

信り

と

の
世界

モノに込められた人々の願い



ごあいさつ

東日本大震災から約1年が経過しました。復興の兆しもいくばくかは見えてはいますが、まだまだ長い時間を要すると思います。一日も早く、安全で安らかな生活が戻りますよう、願うばかりです。

さて、今回の展示は「祈り」と「信仰」をテーマに企画しました。古来より人々は、神仏や自然、また自分たちの祖先などを崇め、様々な存在に祈りを捧げてきました。その対象は祖先の魂など形のないもののほか、仏像や神社、巨木・巨石といった地上に現れているもの、また経塚・墓など、地上と地下に跨って造られているものもあります。

遠い未来や来世へ伝えるため、また自分が生きている現世のため、そして先祖や大地への感謝などのため、人々はどのような願いや祈りを込めて、多くの「しるし」を残してきたのでしょうか。私たちの身の周りにも意外とそれらの「しるし」が眠っているかも知れません。

今回の開催にあたり、ご協力をいただきました所蔵者の皆様をはじめ、関係各位に心より感謝申し上げます。

平成24年2月

盛岡市遺跡の学び館

【表紙写真】

背景／盛岡市宿田南経塚全景

同経塚出土経石（鎌倉時代中期・盛岡市遺跡の学び館蔵）

・上…梵字が書かれた経石（金剛界五仏）

・下…多字一石経（法華経）

目次

◆祈りと信仰の世界

- ・経塚に込めた祈り……………4
- ・経石に込めた願い……………6
- ・一字一石経の隆盛……………8
- ・墓への思い……………10

◆展示資料一覧……………12

◆附章

- ・宿田南経塚出土経石解説……………13
- ・同 写真……………14
- ・まとめ……………62

◆主要参考文献……………66

凡例

- 1 本書は平成23年9月13日（火）から平成24年2月5日（日）までを会期とする、盛岡市遺跡の学び館第10回企画展「祈りと信仰の世界—モノに込められた人々の願い—」の図録である。
- 2 紙面の都合により、本書に掲載できなかった資料もある。



経塚に込めた祈り

経塚とは

「経塚」とは、仏教の経典を納めた塚のことで、多くが寺社の境内や、霊地・聖地とされた山頂などに築かれました。経典は紙本経のほか、礫石経・瓦経・銅版経・貝殻経などさまざまな材質のものがあります。

初期の経塚は、紙本経を経筒に納めて外容器（陶製の壺甕）に入れ、礫で塚を造る形態でした。その始まりは平安時代中期（10世紀末）とされ、貴族・僧侶などの上流階級によって造営されました。最も古い経塚の発見例は、藤原道長によって埋納された奈良県金峯山経塚で、『法華経』を納めた、寛弘4年（1007）の銘が刻まれた経筒などが出土しています。

初期における経塚の造営理由は、当時盛んだった「末法思想※」の影響が強いとされています。釈迦入滅後、次の仏陀となる弥勒菩薩が降臨するとされた56億7千万年後の未来まで、経典を残そうという思いが反映されています。

※永承7年（1052）以降、仏法が正しく行われなくなり、世の中が大きく乱れる「末法の世」に入るという危機意識。

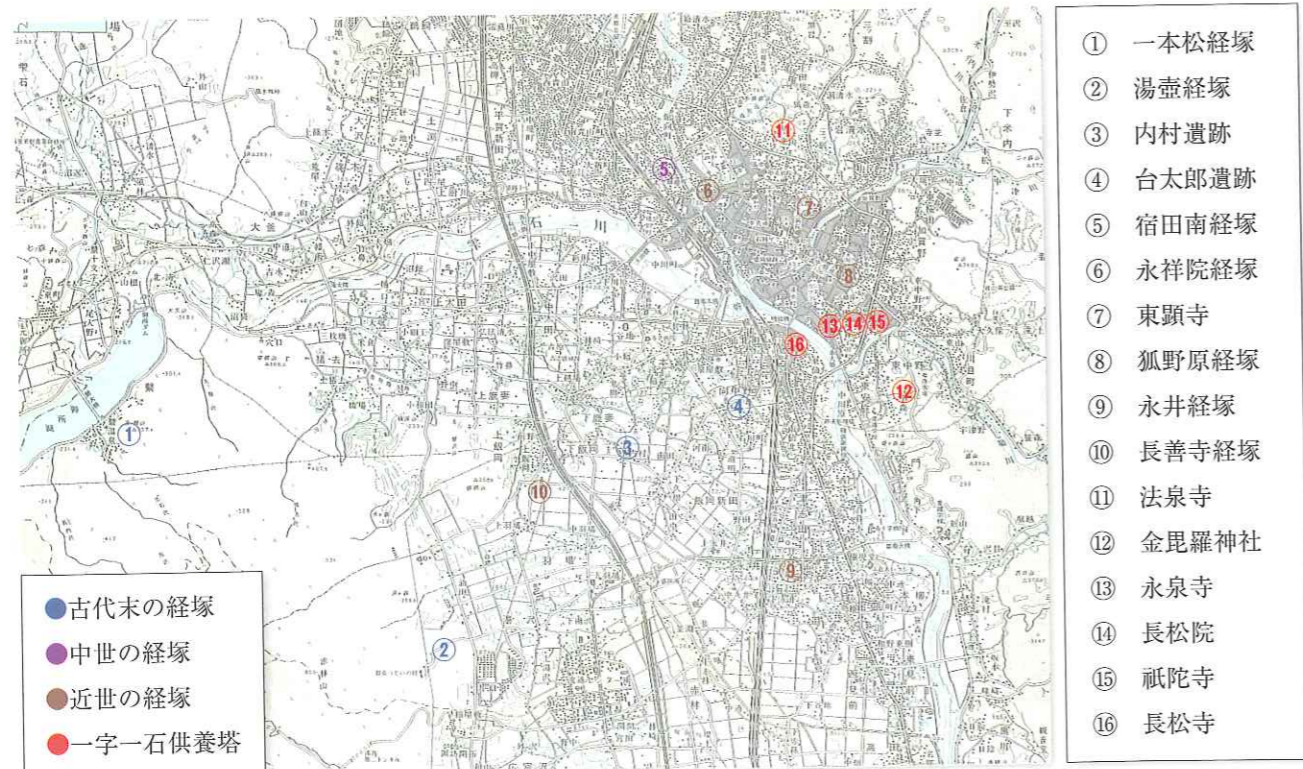
盛岡の経塚

世の中が「末法の世」に入ると考えられ、末法思想が流行した平安時代後期、岩手県内でも奥州藤原氏一門を中心に、経塚の造営が盛んに行われました。もっとも古い経塚は、平泉町の金鶏山経塚（12世紀前半）で、銅製の経筒や、経筒外容器の常滑の甕が発見されています。

その影響は盛岡にも及び、盛岡市内では一本松経塚（繁）、湯壺経塚（湯沢）、内村遺跡（下飯岡）、台太郎遺跡（向中野）などから経典が納められていたとみられる壺や甕が発見されています。外容器に使われた陶器は地元産ではなく、有力者でないと入手できない品でした。そのため、当時の権力者である藤原氏と関わりのある人物が盛岡にもいたのではないかと考えられます。

盛岡市内では中世以降の経塚も確認されています。特に江戸時代に入ると、石に経典を一字ずつ書き埋納した一字一石経塚が多く造られるようになります。

また、経塚そのものではなく「大乘妙典一石一字」などと、経塚の存在を示す文字が刻まれた供養塔（経碑）が市内各地の寺院境内に残されています。



盛岡市内の主な経塚・一字一石供養塔分布図（縮尺不同）

湯壺経塚

湯壺は盛岡市の南西部の湯沢地区に残る地名であり、地名の如く、かつて周辺域から温泉が湧き出たとの言い伝えも残っています。

出土した壺は湯沢の赤林山山麓の東側に向かって張り出した尾根上周辺から発見されたと言われていますが、詳細な出土地点や出土状況は不明で、実際に経塚からの出土であったか否かも不明確です。壺は12世紀後半の「常滑二筋文壺」で、赤褐色に焼かれ、胴部には二筋の平行沈線文が施され、口縁部から肩部にかけて自然釉が掛かるもので、ほぼ完形で出土しています。

※所蔵／盛岡市都南歴史民俗資料館



湯壺経塚出土の常滑二筋文壺

一本松経塚

一本松経塚は盛岡市の西部、繁温泉東側の湯ノ館山から西に突出する尾根先端部に位置しています。江戸時代には眼下を沢内街道が通っており、繁は古くから湯治場として人々の往来も盛んな場所でした。

経塚は直径5m、高さ1.2mほどで、塚表面には人頭大の礫を確認することができます。

壺は12世紀前半の渥美産の灰釉壺で、塚に自生した大きな松の根元の石積み内部から出土したと伝えられています。口縁部の一部を欠いていますが、ほぼ完形で、緑色の美しい灰釉が掛けられた東北地方でも稀有な優品とされています。



一本松経塚出土の渥美灰釉壺（個人蔵）

内村遺跡

内村遺跡は盛岡市南西部、下飯岡字内村にある遺跡で、微高地上に立地します。大甕は昭和9年（1934）に耕作中に発見されたものと伝えられています。

12世紀後半の常滑産の製品で、口縁部の一部が欠損していますが、概ね完形で、このことから丁寧に埋設されていたことが窺われ、経塚もしくは火葬墓、または堂社の地鎮として埋納された可能性が考えられます。口縁部が強く平らに外反し、球形の胴部には格子目状の叩き文が3段に巡り、口縁部から肩部にかけて緑色の灰釉が厚く掛けられています。東北地方の常滑産の製品中でも、大形の資料で貴重な遺物とされています。



内村遺跡出土の常滑大甕

台太郎遺跡

台太郎遺跡は盛岡市街地の南西部、向中野に所在します。奈良・平安時代を中心とした遺跡ですが、13世紀から14世紀にかけての居館跡や、これに並行する道路跡なども確認されています。

この壺は渥美産の小形壺で、遺跡北東部から基礎工事中に偶然発見されたものです。12世紀後半の製品で、頸部から上を欠損しています。上部の膨らんだ胴部で、ロクロで丁寧に作られています。肩から胴部上半にかけては、緑色の灰釉が掛けられ、内部の底にも灰釉の飛沫が認められます。詳細な出土状況は不明ですが、遺跡の立地が交通の要衝で河川に臨む場所であることから経塚に関連する遺物と考えられます。



台太郎遺跡出土の渥美壺

経石に込めた願い

紙本経から礫石経へ

末法思想が盛んだった平安時代と比べ、中世にはその意識が薄れるものの、埋経という行為は仏教の積善業・功德業・勸進業の一形態として、「奉納」・「供養」を重視したものに変わっていきます。「廻国聖」という、法華経を写経し、各霊場を巡礼して塚を築き埋経する宗教者らによって、経塚が広められました。

一方、12世紀末頃から「礫石経」が出現します。小石1個に一字ないし複数字の経典を墨書で書き写したもので、「一字一石経」・「多字一石経」ともいいます。経塚に伴い経碑（築造の目的、供養者名、供養の年月日、経典名などを記した石碑や石塔）が建立される事例が多く見られます。

経石に紀年銘のあるもので最古の例は、宮城県利府町菅谷道安寺A区1号墓の「弘安六年（1283）」です。岩手県では「五部大経 一石一字 雲公成之 永和第二（1376）」と記された宮古市の経碑が最も古いと考えられます。

古代の経塚は、神社や寺院と密接に関係した場所に造立されましたが、対する中世以降の礫石経塚は、それ以外にも丘陵地や交通の要衝など、様々な場所に造られました。

宿田南経塚

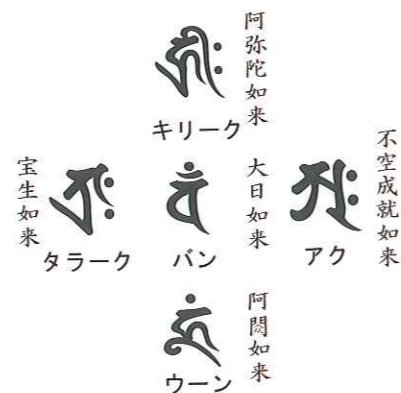
宿田南経塚は、盛岡市の中心部より北西へ約3kmの盛岡市北夕顔瀬町地内に位置します。現況は宅地で周辺部よりも一段高くなっています。遺跡西側は4~5mと最も比高差があり、江戸期以前は、川に面した周囲を見渡せる小高い丘だったと考えられ、経塚はこの丘の西側に位置しています。

宿田南経塚は、墳丘（盛土層）構築後に土坑を穿ち、経石を埋納する形態です。主体部となる土坑の規模は一辺約3.4m、深さ約1.0mです。他の事例を見ると一辺1m前後のものも多く、本経塚はかなり大型の部類になると考えられます。

出土した礫の数は38,252個ですが、墨痕あるいは文字が確認された経石は186点です。その書写内容の内訳は、妙法蓮華経が29点、金剛経が3点、梵字が77点、不明が77点です。経文が書写されたものは、全て多字一石経で、梵字は、一字のみの礫もありますが、大半は複数の梵字が書写されていました。

梵字は、𑖀 (バン: 大日如来)、𑖄 (ウーン: 阿闍如来)、𑖙 (タラーク: 宝生如来)、𑖛 (キリーク: 阿弥陀如来)、𑖞 (アク: 不空成就如来) の種子と、これら五仏を組み合わせた金剛界五仏があります。金剛界五仏は西を上とし、中心に𑖀、西に𑖛、北に𑖞、東に𑖄、南に𑖙を配置し、梵字で描く曼荼羅、いわゆる「種子曼荼羅」を書写しています。

こんごうかいごぶつ 金剛界五仏とは・・・



金剛界五仏とは金剛界曼荼羅とも呼ばれます。「曼荼羅」とは、古代インド語であるサンスクリット語に由来し、仏教（特に密教）において聖域、仏の悟りの境地、世界観などを仏像、シンボル、文字などを用いて視覚的・抽象的にあらわしたものです。



宿田南経塚 遠景



経塚 全景



経塚内部の様子



経塚主体部土坑の断面



経石 出土状況



経石 出土状況



経石 (妙法蓮華経書写)



経石 (梵字書写)

一字一石経の隆盛

共同体としての祈り

江戸時代になると、一字一石経を納めた礫石経塚が全国的に最も隆盛します。礫石経塚は本来の「経典を後世に残す」という目的とは異なり、地鎮に伴う儀礼や亡くなった方の追善供養、村内の安全祈願・五穀豊穡など現世利益を祈願して造営されるものに変化していきます。

盛岡市内でも多くの一字一石経塚や、その存在を示す一字一石供養塔（経碑）が発見されていますが、いずれも寺社の境内に造られる場合が多いようです。

経石に経典の字を書いたのは寺の僧侶と考えられますが、一人ですべてを準備し、経塚を造ったわけではなく、石の運搬や洗浄など、村や地域の住人たちが様々なかたちで関わったと考えられます。仏と縁を結ぶことを「結縁」といいますが、地域における寺院を中心として、人々が協力して経塚を造ることは、共同体の地縁・結びつきを強めるという意味もあったのでしょう。

経塚は、時代とともに移り変わる人々の信仰心や宗教観、ひいては人と人との結びつきを現代の私たちに教えてくれる、貴重な資料なのです。

永井経塚

「永井経塚」は、JR東北本線岩手飯岡駅の東約250m、盛岡市永井に所在し、現在は児童公園内に保存されています。

大正6年（1917）に初めて調査が行われ、調査以前には鉄刀が出土したと言われていたことから、古墳の可能性が指摘されていました。

しかし、その後の調査で「経文を墨書した扁平の川原石」、「柄鏡」が出土したことから改めて経塚であることが確認されました。

過去の記録では、経塚上に1.2mの石碑が直立していたとされています。

現在は、約50cmの高さを測る塚と石碑をみることができます。また、石碑の周囲には5cm前後の経石と思われる扁平な川原石が散在しています。

一字一石一礼供養塔

盛岡市玉山区寺林地内に所在する供養塔です。江戸時代、東北地方は何度も飢饉にみまわれました。特に250年ほど前の元禄・宝暦年間の大飢饉では、多くの人々が亡くなりました。供養塔は、飢饉による餓死者を供養するために、明円寺（岩手町川口）の14代実秀和尚により、安永7年（1778）に建立されました。



出土した経石



一字一石一礼供養塔

平成8年（1996）、道路拡張工事に伴い発掘調査が行われ、供養塔の下部から、『法華経』が書かれた一字一石経が約37,500個出土しました。そのうち判読が可能な経石は540点です。



永井経塚に現在も残る石碑（花崗岩）

永祥院経塚

盛岡市材木町内に所在する経塚で、昭和58年（1983）、下水管工事の際に偶然発見されました。約40,000点の一字一石経が出土し、書写された経典は「妙法蓮華経」と考えられています。

多字石には戒名や年代が記されているため、そこから経塚造営の年代は安永3年（1774）と推定され、追善供養が目的だったと考えられます。

永祥院は、地蔵が小僧に姿を変えて酒屋に通ったという、「酒買地蔵」の言い伝えでも知られる寺院で、江戸時代初期の作とみられる市指定有形文化財「木造地蔵菩薩坐像（酒買地蔵尊）」があります。



永祥院経塚 全景



多字一石経（戒名）



一字一石経

長善寺経塚

長善寺経塚は、盛岡市上飯岡に所在する長善寺境内の山門附近にあります。平成22年（2010）、寺院建築に伴う忠霊塔移設工事の際、偶然発見されました。

経石が埋納されていた土坑の規模は約2.4m×約1.8mの長方形で、深さは0.4～0.5mと考えられます。本来は塚状の盛土や経碑が存在したのと思われていますが、境内の配置替えなどにより削平され、失われていました。現在、経塚は完掘せずに保存するため現地に埋め戻しています。

経石には「妙法蓮華経」が書かれており、その文字総数が69,384字であることから、経石の数も同じと考えられます。



長善寺経塚 全景



経塚 発掘風景



一字一石経（長善寺所蔵）

墓への思い

墓石の原点

墓地に建てる石塔の原点は石卒塔婆で、天禄3年(972)の記録が残る比叡山に現存する第18代天台座主良源(912—985)の墓が最古とされます。院政の時代には五輪塔の型式による貴族の石塔が盛んに建てられ、平泉中尊寺釈尊院墓地には仁安2年(1167)紀年銘の五輪塔が存在しています。

板碑は石卒塔婆の一種で、関東地方を中心に南北朝・室町時代に最も盛んとなり大量に造立されましたが、17世紀には壊れています。

庶民が石塔を建てるようになるのは江戸時代以降で、地域差はあるものの、古くは17世紀後半の寛文・延宝期から元禄一享保期で、幕末期に一般化したとされます。型式は五輪塔・板碑型・舟型光背型仏像碑から箱型・角柱型へと変化し、個人・夫婦で一基の形から、20世紀以降は家単位の先祖代々の大形石塔へと変化してきました。

繫の板碑（石卒塔婆）

板碑は現在、繫温泉の湯ノ館山麓の共同墓地に所在しますが、御所ダム建設以前は繫字下瀬川敷の高台にあった瀬川家墓地にありました。

石材は雫石町葛根田玄武洞等に産出する玄武岩で、地上部分の高さ2.24m、幅0.6m、奥行0.56mの角柱状の自然石を使用し、石碑の正面上部に梵字「𑖀（読み：ア）」一字を刻んだ種子塔で、胎蔵界大日如来を示すとされています。

文字は刷毛書体・薬研彫りで鋭く刻まれ、他に紀年銘などは見られませんが、形状や文字の様相から、概ね南北朝時代(1336—1392)、当時この地域を治めていた領主層の造立と考えられます。

所有者の瀬川家(正福院家)は同所に江戸初期から存在する旧家で、大宮神社別当を兼ねた羽黒修験山伏の末裔でもあったとされています。



繫の板碑

先祖代々の墓

現在のお墓は「〇〇家先祖代々の墓」「〇〇家之墓」と刻まれた石塔が多く、少数派ですが「個人名」や個性的なデザインも見受けられます。

しかし先祖代々の墓の普及は古くからのことではなく、江戸期に現在の状況に連続する石塔が発生した時点では、墓域は家ごとであるものの、石塔は家単位でなく個人単位で、しかも生前の個人名でなく、「〇〇〇〇居士」「〇〇〇〇大姉」など仏教式の戒名を石塔前面に刻むのが普通で、夫婦の比翼塚でも個々に戒名は刻まれています。

やがて近世後期から幕末にかけて現在の形態の先駆的形態が出現し、戦後の昭和35年(1960)頃になってから、火葬施設の整備により納骨のため角柱型石塔の下部に「カロウト(カラウツからびつ・唐櫃)」と呼ばれる納骨空間が設けられるようになりました。

柄鏡

柄鏡は円鏡に柄を付けたもので、室町時代に始まり、江戸時代には和鏡の主流となりました。柄が付くことにより、鏡背の中心にあった亀鈕も不必要となり、鏡背全面に花鳥人物を題材にした飄逸な文様が自由に表現されるようになります。

江戸中期に大流行し、後期には直径8寸(24cm)以上の大形品も出現しますが、髪が大きく張り出し派手になる女性の髪形を映し出すため、柄鏡も徐々に大形化したと言われています。

展示している柄鏡は、いずれも江戸期の墓内に埋納された副葬品で、直径が2~3寸(6~9cm)前後の小形品で、鏡背に記された文様には、南天・松竹・水仙、鶴亀・木菟などの動植物を描き、家紋付きの製品なども見られます。



出土した柄鏡
盛岡市西黒石野遺跡・館遺跡出土

乙部野遺跡

乙部野遺跡は盛岡市乙部に所在する平安時代の遺跡で、北上川の東岸に発達する河岸段丘上に立地し、同じ段丘上には町田遺跡、乙部方八丁遺跡など同時代の遺跡が確認されています。

平成15年(2003)7月、乙部野遺跡内にある小坂稲荷神社の敷地内から火葬骨が入った壺(骨蔵器)が2点発見されました。工事中に偶然発見されたため、どのように埋設されていたかは不明ですが、蓋のある壺が2個並ぶように埋められていたようです。

乙部野遺跡の南に位置する乙部方八丁遺跡からは、平安時代中頃の掘立柱建物跡、竪穴住居跡とともに多量の墨書土器が発見され、北上川を挟んだ対岸には、古代城柵として有名な徳丹城跡が位置するなど、環境的にこれらの遺跡と乙部野遺跡が関連性を持っていた可能性があります。

発見された骨蔵器は、短頸壺と呼ばれる形の土器に似ていますが、口径の寸法が合う蓋があることから、最初から「骨蔵器」として製作された土器であることが考えられます。



乙部野遺跡出土の骨蔵器



骨蔵器内部の様子

南部家墓所

盛岡市街地の北部、北山に所在する聖寿禅寺は、盛岡藩主南部家の菩提寺で、藩主とその親族が葬られています。

3代藩主重直は、寛文4年(1664)、江戸桜田の上屋敷で死去。遺骸は13日かけて盛岡に運ばれ、葬礼を経て埋葬されました。

平成8年(1996)、石塔である五輪塔の解体修復を兼ねて地下の埋葬施設を調査した結果、石塔直下の深さ2.5mの地点から常滑の大甕が出土しました。甕は高さ72cm、口縁部径36~38cm、胴部径54cm、底部径14cmを測り、全体に自然釉が掛かり、窯で焼成する際に融着しないように挟み込んだ陶片が残っています。

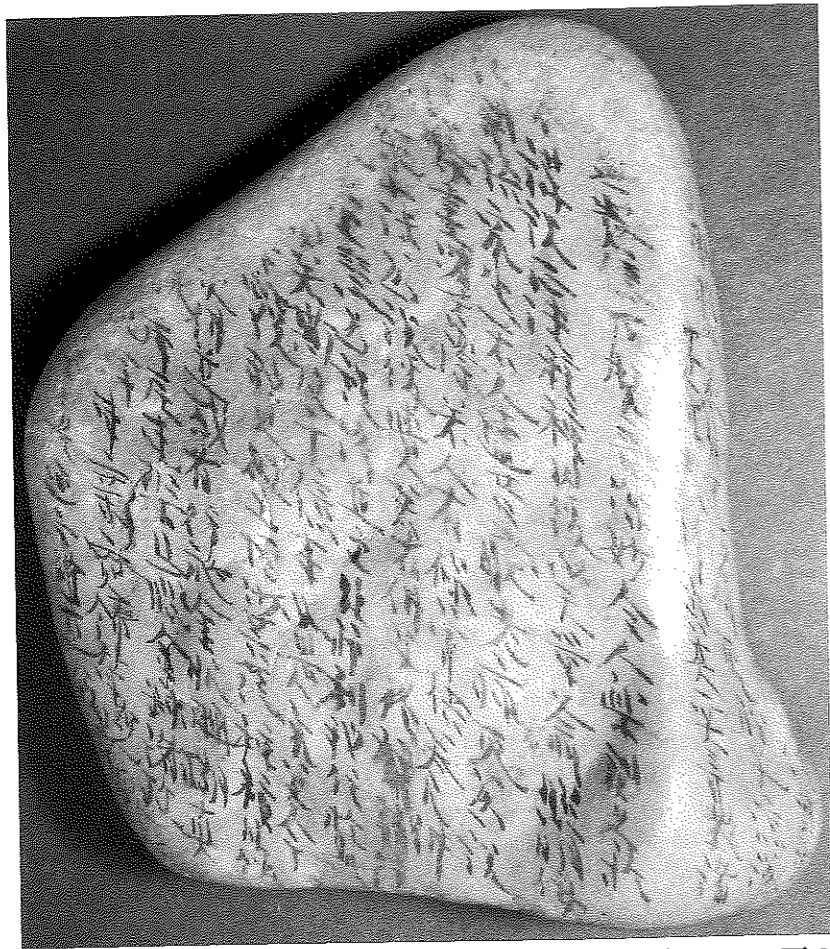
内部からは火葬骨のほか慶長小判12枚、寛永通宝、皇宋通宝が副葬されていました。甕棺は常滑焼の大甕で、粘土紐を輪積みにしたヨリコ造りによるものです。甕棺の周囲に敷かれた木炭層からは、細かな遺骨とともに火葬した木棺や調度品などの金具類が出土しました。



3代藩主重直の墓坑と甕棺



南部重直墓所出土の慶長小判



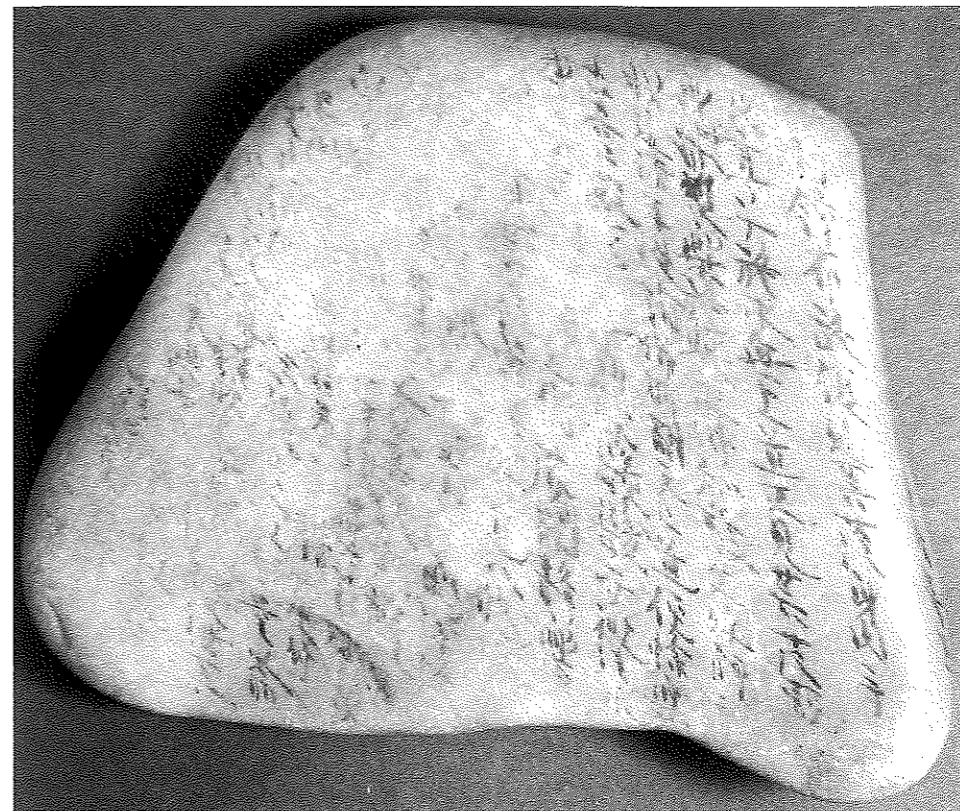
經石130 面2



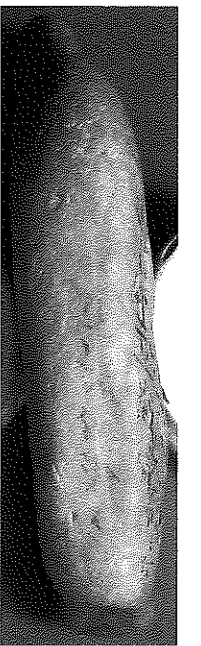
經石130 面1

面2
 菩薩無數億万梵音深妙令人樂聞各於
 世界講說正法種種因緣以無量喻照明
 法開悟衆生若人遭苦厭老病死為說
 涅槃盡諸苦際若人有福曾供養
 志求勝法為說緣覺若有弟子修種種行
 求無上慧為說淨道文殊師利我住於此見
 聞若斯及千億事如是衆多今
 當略說我見彼上恆沙菩薩種種因緣
 而求仏道或有行施金銀珊瑚眞
 珠摩尼碼磲金剛諸珍
 奴婢車乘寶飾輦與歡喜
 布施廻向仏道願得是乘
 (面1・面2ともに妙法蓮華經 卷一 序品第二)

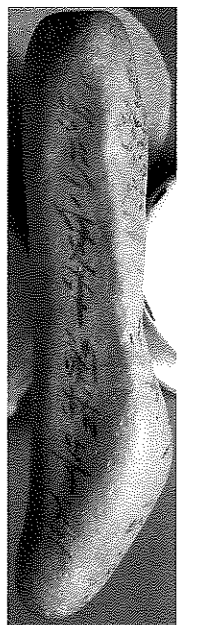
第5図 經石130(1)



經石130 面5



經石130 面3



經石130 面4

面3
 □□□諸仏所□□□□□
 面4
 馴馬宝車欄楯華蓋
 面5
 軒飾布施復見菩薩身肉手□
 及妻子施求無上道又見菩薩頭目
 身體欣樂施與求仏智慧文殊師利
 我見諸王往詣仏所問無上道便捨衆
 士宮殿臣妾剃除鬚髮而被法服
 或見菩薩而作比丘獨處閑靜樂誦
 □□□又見菩薩安禪□□
 □□□定慧眞足以無量喻
 □□講法欣□□化諸苦
 (面3・4・5ともに妙法蓮華經 卷一 序品第二)

第6図 經石130(2)